

いわて鳥獣保護センター通信 第14号

(発行日:令和 元年12月12日)



平成の時代が終わりを告げ、令和の新しい時代が初まった記念すべき一年があと一か月で終わろうとしている今日この頃、今年保護され無事に自然に戻っていった鳥獣たち、治療・介護の甲斐なく天国に旅立っていった鳥獣たち。鳥獣保護センターの約41千平方メートルの広大な敷地内、そして入口からの雄大な四季の岩手山の景色を日々眺めながら、岩手の自然の四季の美しさと豊かさ、そこに普段目にすることはできなくても多くの生き物たちが暮らし、そういう生き物たちが不慮の事故でセンターに保護されてきた時、その命に僅かでも獣医師として関われることの喜びと幸せを日々幸せに感じながら働いています。

さて、岩手県に鳥獣保護センターが開設されたのは今から48年前の昭和46年、昭和40年からキジの放鳥を目的にキジ養殖場としていた開設されていた施設を、県で開催された第25回愛鳥週間全国野鳥保護のつどいを機に、幼傷病野生鳥獣の救護を目的に「岩手県鳥獣保護センター」と改称されたのが始まりです。

岩手県は西に奥羽山脈、東に北上山地が走り、沿岸には太平洋と三陸のリアス式海岸がある世界に誇れる豊かな自然に恵まれ人々も自然と共存しながら暮らしてきました。そうした多様な自然環境が残されてきたことで、環境省のレッドデータブック絶滅危惧種100に指定されているクマタカ、全国でも僅か5百羽と推定されているイヌワシが生息し、県庁所在である盛岡市内でも、特別天然記念物に指定されているニホンカモシカが目撃が寄せられるほど豊かな生物の生息環境が維持されています。

保護された鳥獣の数、種類を見ていくことで生息状況・生物の多様性の変化が見えてくるように感じます。保護される鳥獣は自然界の幼傷病鳥獣の一部ですが、車、電線との衝突事故、幼鳥獣の数の多さを考えると、生活の利便性を高めつつ生息環境の保全を図りながら、岩手の生物多様性を次世代の子供たちに引き継いでいくことも我々の責務でもあり、「幸福」にも繋がっていく大切なことではないのかな、と考えています。



ハチクマ保護日記

今年7月にハチクマのヒナがセンターに保護されたので、その経過を報告します。ハチクマは渡りをするタカ類の代表種で、5月中下旬に繁殖のために日本に飛来し、9月中下旬から10月上旬に東南アジア（スマトラ、ジャワ、ボルネオ、フィリピン）へと南下します。抱卵期間は28－35日、雛は孵化してから35－45日で巣立ち、巣立ち後30－60日程度で親から独立します。

ヒナの発見・収容

7月18日、花巻市東和町において、猛禽類に連れ去られていたヒナが地面に落下したのを通りすがりの運転者が発見。通報を受けた花巻保健福祉センターの職員により鳥獣保護センターに搬送。到着時の体重600gで、全身が綿羽に覆われ、翼と尾の先端に羽毛が認められたことからおよそ15日齢と推定されました。外傷としては、猛禽に掴まれた際にできたと思われる浅い刺し傷が背と胸にあるものの、大きな異常は認められなかったことから、他の猛禽類に連れ去られていたのではなく、親鳥が巣から落ちたヒナを運び上げようとしていたのかもしれない。



推定15日齢(収容時)

保護

保護するにあたっては、まずは与えた餌を食べてくれるかが重要になりますが、センターにはハチクマを保護した経験のあるスタッフはおらず、あれこれ試した結果、缶のドッグフードとヒヨコを中心に、カエルやバッタなどを時折給餌しました。8月10日（推定37日齢）には、幼鳥の羽衣がほぼ生えそろう、体重増加も約1200gで安定。8月15日（推定42日齢）には、止まり木を飛び移るようになったため巣立ちと判断しました。



推定37日齢(羽衣が生えそろう)

8月中旬以降はスズメバチが巣を作りはじめたため、センター敷地内で捕ったキイロスズメバチのハチノコも給餌しました。やはりハチクマだけあって、ハチノコに対する反応は他の餌へのものとは比べ物にならず、ピーピー鳴きながら翼を激しくバタつかせ興奮します。しかし、スズメバチのハチノコを確保するのは大変なのです。敷地内のスズメバチの巣を捕るには、当然刺される危険を伴いまして購入するにしても大変高価ですし……。また、放鳥に向けた飛翔訓練は、渡り前の9月上旬の放鳥に間に合わせるため、長期を要する鷹匠の技術を用いた訓練は実施せず、フライングケージの各所に餌を配置するのみとしました。



推定62日齢(放鳥)

放鳥

保護期間を通じて、給餌者が餌を与えに行くと、止まり木から降りて餌鳴きしながら給餌者の長靴をつつくなどの行動（刷り込み）が確認されており、人間に不用意に近づくようになった野生動物をむやみに放野すべきではないのではないかと悩みましたが、放鳥後に他の多くのハチクマと合流・渡りをするので、うまく野生復帰してくれることに期待し、9月5日（推定62日齢）に小規模の鷹柱が立つ天峰山に放鳥しました。

再保護

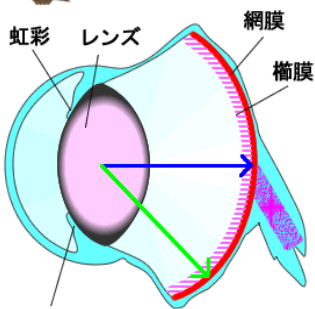
9月18日、登山者から通報があり、姫神山山頂付近にて登山者に近付き人気者になっている猛禽がいるとのこと。確認したところ、9月5日にハチクマであることが判明し、再度捕獲・収容となってしまいました。目撃者の話では、餌鳴きしながら、積極的に人に接近し、食べ物をもらっていたとのこと。挙句の果てには、記念撮影にまで応じていた様子。残念ながら、ここでの渡り時期も過ぎてしまったため、野生復帰は断念し、盛岡市動物公園にて飼育していただくこととなりました。



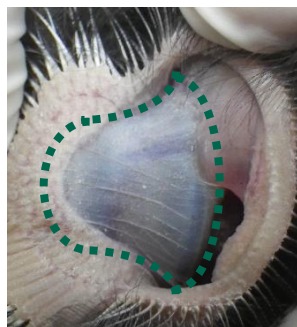
姫神山山頂にて(登山者撮影)

今回『刷り込み』を招いた原因としては、スタッフがヒナ可愛さから必要以上に個体に接触したこと(過保護)、差し餌の際にハンドパペット(親鳥に似せた指人形)などを用いなかったこと、顔を隠すことなく給餌に当たっていたことがあげられます。センターには様々な種類のヒナがくるので、事前に特定の鳥種のハンドパペットを用意することは難しいですが何かしらの実行可能な対策を考えておく必要を感じました。自然に返せなかったハチクマですが、こんな経緯も知った上で盛岡市動物公園に見に行っていたらありがたいです。

動物の不思議



虹彩
フクロウの眼球は球形ではない



耳の穴から見える眼球



左右の耳で位置と大きさが違う

フクロウの首がよく回ることを知っている方は多いのではないのでしょうか?ちなみに、人間は左右それぞれ60度くらい回りますがフクロウは、なんと270度!つまり真後ろはもちろん、右回りに首を回して真左を見ることだってできます。では、なぜそれ程までに回らなければならないのか?その答えは眼球の構造にあったのです。フクロウは眼をキョロキョロ動かせないんです。フクロウは、夜の少ない光の中でも目が見えるように大きな目(大きな瞳孔)を持っていますが、眼球を大きな瞳孔に合わせて丸いものにしてしまうと頭蓋骨に収まらなくなるため円筒状の眼窩に固定しているのです。そのため、眼球を上下左右に動かすことができないので、その分首を回すことで、木に止まって体を動かさない体勢のままでも、全体を把握できるようにしているのです。

それ以外にもフクロウの特徴はたくさんあって、左右非対称の耳や細かなギザギザのある風切羽があげられます。耳といっても耳介はなく大きな耳の穴が開いているだけなのですが、その穴は左右で大きさも位置も違うのです。右耳は目の高さにあるのに対し、左耳はそれより上に位置しています。風切羽は、他の猛禽の風切羽の前縁が滑らかなのに対し、フクロウのそれは細かいギザギザがついています。これらの特徴にもちゃんと理由があって、まず耳に関しては、左右の耳で異なる音の聞き方をすることで、音源をより立体的に捕えられると言われていています。そして、余談ですが、耳の穴からは先ほど話に出てきた眼球が見えちゃうんです。ちょっと気持ち悪いですね。風切羽のギザギザ構造は、滑空する際の音を消す効果があるそうで、



風切羽前縁がギザギザになっている

消音効果をもった新幹線のパンタグラフの形状に応用されていることでも有名ですね。

少ない光でも闇夜を見通せる大きな円筒形の眼球、動かない眼球をカバーするために発達した首の広い可動域、小さな音源も逃さない左右非対称の耳、獲物に気づかれずに近付くための音の出ない羽。これらはすべて、夜にネズミなどの警戒心の強い獲物を効果的に捕まえるための構造なのです。フクロウの体には、夜の猛禽として君臨するだけのちゃんとした理由があったんですね。



センターお仕事日記

現在当センターでは、残念ながら治療の甲斐なく野生復帰できなくなってしまった白鳥5羽を終生飼養しています。春から秋の終わりまでは、センター内の池のある広い敷地に放して自然に近い環境の中で生活をしています。冬は池から引っ越して白鳥専用舎で生活してもらいます。

今回のセンターお仕事日記はその白鳥の引っ越し作戦についてのお話です。

まず、引っ越しが必要な理由ですが、それは昨今問題になっている鳥インフルエンザです。万が一感染している渡り鳥と接触して白鳥が一羽でも感染してしまうと、白鳥をはじめとした収容動物に感染する恐れがあり、更にはそこから周辺の養鶏施設へと感染が広がるおそれもあります。そういったリスクを避けるために冬季間は、専用の畜舎に隔離し野鳥との接触を避けています。

今年の作戦は、「餌で釣って橋の上で一網打尽作戦」です。池にかかっている橋の真ん中に餌をおいて、食べている間に橋の両側を塞いで白鳥を閉じ込め捕獲する作戦でした。閉じ込める所まで行きましたが、いざ捕獲の段階で一致団結した白鳥が網を突き破り一斉に逃走、ものの見事に失敗してしまいました。



自然を満喫する白鳥

捕獲成功かと思いきや...



第二の作戦遂行中の様子



越冬地(白鳥の別荘)



その後なかなかよい案が浮かばず、去年行った方法で再度捕獲を試みることにしました。その方法は、池の両岸にロープを渡し、徐々に池の端に追い込んで、上陸させ更には畜舎へと誘導する方法です。この方法だと、白鳥が自分のペースで歩いて行くため、人間に抱えられるストレスもなく、白鳥も人間も負担が少なく済みます。気がかりなのは去年の方法なので白鳥たちが覚えていて逃げるのではないかということでした。いざ始めてみると意外や意外、白鳥たちは抵抗もせずロープと追い込み役の誘導にしたがって、陸地へ上がり畜舎の方へ向かって行き、すんなりと畜舎の中へ入って行きました。

自然から隔離した状態なので一見窮屈そうに感じますが、白鳥たちは野鳥との接触を避けられるだけでなく、柵で囲われているので狐などの外敵に襲われることなく安心して休むことができます。さらに建物の中で過ごすこともできるため、天候を気にせず、餌の心配もなく、プールも完備されており、寝床の掃除もしてもらえる、白鳥にとってはホテル住まいのような快適さではないでしょうか。

お問い合わせ先
岩手県鳥獣保護センター
住所：岩手県滝沢市砂込390-29 TEL：019-688-4728